

書陵部蔵『年中行事絵巻』諸本について

相馬 万里子

平安季世に製作された『年中行事絵巻』は、原本は失われ、現在、江戸期の模本を遺すのみである。このうち、後水尾院の勅定により住吉如

慶一派が模写した住吉本十六巻が、その作成経緯や筆者などが明白なところ、比較的巻の構成が整っていることなどから、おそらく原本に最も近い模本であろうとされている。しかしこの絵巻は、もと六十巻あったともいわれ、また現在の住吉本は、明治末期現所蔵者の手にわたるまでの間に、錯乱した時期があるらしく、巻の構成等に疑問のある巻も生じており、後に追加された別本三巻も含めれば、問題とされる点は少なくない。これらの問題を解決するには、江戸期に写された他の諸本との参照が必要であるといわれている。

現在、書陵部にある『年中行事絵巻』模本は、鷹司家旧蔵本、松岡家旧蔵本、水野忠央旧蔵本等、各々特色をもつ江戸期の写本である。鷹司本、松岡本については、既に『日本絵巻物全集 第24巻 年中行事絵巻』で、略々紹介されているが、この両本も細かく見直してゆけば、それぞれ問題を含んでいる。本稿では、これらの本の概略を紹介し、管見

に入った二三の問題点について述べてみたい。

一

書陵部蔵『年中行事絵巻』は、抜書等も含め、左記の十二種である。

- 1 年中行事絵巻 鷹司家旧蔵本 白描 二〇巻 (函号鷹六六)
- 2 年中行事絵巻物 松岡家旧蔵本 白描 二五巻 (B二二)
- 3 年中行事―摹古絵巻^①ノ内― 水野忠央旧蔵本 彩色白描 一四巻 (B二八)
- 4 年中行事抜書―同右― 同右 白描 一卷 (B二六)
- 5 年中行事朝覲行幸図―同右― 同右 部分彩色 一卷 (B二八)
- 6 年中行事絵抄出賭^② 松岡家旧蔵本 部分彩色 一帖 (C二六・六七)
- 7 年中行事絵川渡図 松岡家旧蔵本 部分彩色 一冊 (C二六・三六)

8 年中行事除目竝中宮大饗拔写 白描 一卷 (四六〇)

9 年中行事絵巻拔写 除目弓場始
除目御前儀外二圖 葉室家旧蔵本

白描 二卷 (葉・四六六)

10 年中行事画卷略 長沢伴雄稿 白描 二冊 (三・二五)

11 賀茂臨時祭絵巻 白描 一卷 (E・一七)

12 賀茂詣図 鷹司家旧蔵本 彩色 一卷 (鷹・六六)

なお、この他に『年中行事絵巻』の書名で橋本家旧蔵本二卷⁽²⁾(B・六三〇)があるが、これは江戸末期の年中行事を描いたもので、全くの別本である。

1の鷹司家旧蔵本は江戸末期写とみられるが、奥書、詞書、注記等が全くなく、祖本の伝来系統などは不明である。各巻とも、珠つき七宝つなぎ文様の紙表紙に、うちつけ書きに「年中行事」という外題と各段の題名が書かれている。ほとんどの巻の端裏に貼紙をして行事名を注記しており、その上、巻緒に符箋がついている巻もある。「女舞 鬨草」の巻以外の十九巻の表紙に「三千百六号三重子箱入 拾九巻之内」の貼紙があり、「女舞 鬨草」の巻は後に加えられたらしい。各巻縦の寸法は約四七糎。巻の番号はなく、順序は不明である。ここでは『日本絵巻物全集第三巻』において附された巻の順に従って仮に番号をつけ、表紙等に書かれた各段名を次に記しておく。

一 家拝礼儀 式部省図 (付札)「此画省試敷」

二 大饗蘇甘栗使 同鷹飼自野帰参 尊者牛飼饗

三 母屋大饗

四 大饗十五巻之内相違処

五 除目御前儀 同竟夜 同清書 外記庁儀

六 園韓神祭 鎮魂祭

七 外記政始晴儀 南所儀 陽明門出立

八 春日詣 (裏面貼紙)「春日詣未詳」

九 左右馬寮図 (付札)「牧牛馬儀未詳」

一〇 鬨鶏臣下第之儀

二 女舞 鬨草 (裏面貼紙)「女舞 此画世称知祭
伊良古未詳 鬨草」

三 擬階奏 灌仏

三 齋院御禊行列 祭誓固召仰

四 齋院御禊日馬御覧 同御禊東河儀

五 書司献菖蒲 六府献菖蒲

六 忌火御飯 御曆奏

七 射場始

八 法会画 (付札)「修□図未詳」

九 賀茂臨時祭庭座 同行列 同社頭儀 同還立御神楽

三 賀茂詣 (付札)「行列之末十五巻ニ無之処令写之 覧十列同」

以上の二十巻のうち、住吉本と同じ段は、第二巻第二段鷹飼自野帰参、第四巻大饗(住吉本では大臣家大饗終の段の左側の一部分にあたる)、第五巻第一段除目御前儀(住吉本では叙位の段)、第三巻齋院御禊行列

の末、暴走する牛車（住吉本では五月印地に続く馬長の行列の中にある）の四段で、しかも括弧内に注記したように、住吉本とは名称が違う、あるいはその置かれた位置が違う等の差異がある。このうち第四巻を除く三段は、現在の住吉本では行事の順が乱れている箇所である。第四巻は住吉本の大饗終の段の一部分に当り、住吉本には省略されている画面の最も左端の部分が、鷹司本では描きこまれている。一方、住吉本に追加された別本三巻とは重なる段は多く、第三巻母屋大饗（別本大臣家大饗鷹飼渡の段）、第五巻第二段除目竟夜（別本除目御前儀）、第六巻園韓神祭、鎮魂祭、第七巻第一段外記政始晴儀（別本外記政）、第二巻女舞 闌草（別本やすらいはな、高雄法華会、この巻は別本には詞書があるが、鷹司本にはない）、第三巻擬階奏 灌仏、第五巻書司献葛蒲、六府献葛蒲、第六巻第一段忌火御飯、第七巻射場始、第九巻賀茂臨時祭などが同じであるが、総じて住吉別本の方が粗い写しや略写で、鷹司本系からの抜写ではないかと考えられる。残りは住吉本にはみられない段であり、さらに『日本絵巻物全集』所載の諸本対照表によれば、第一巻家拝礼儀 式部省図、第五巻除目の後半、第八巻春日詣 第一巻齋院御禊日馬御覧、同御禊東河儀、第六巻後半の御曆奏、第三巻賀茂詣第一、三段などは、鷹司本にしかない段である。鷹司本のいくつかの段については、後で少し細かくふれることにする。

2の松岡家旧蔵本は、「内宴」の巻末に、「寛政五年癸丑四月並河甫雲写」の奥書がある。多分、書写奥書であろうと考えられるが、他の二十

四巻には奥書はない。しかし大部分がよく似た筆致の写しである。内容はほとんど住吉本、別本の範囲にとどまり、比較的写しは粗く、一場面のみの短かい巻も多い。各巻、渋引の紙表紙にうちつけ書きに「年中行事」という外題と行事名が記されており、端裏にも注記のある巻が多い。朝餞行幸の巻等のごく一部分に彩色がみられる。各巻縦約四九糎。これも巻の番号はないので、『日本絵巻物全集』で仮に付けられた順序により、各巻表紙の行事名等を左に記すことにする。

- 一 二宮大饗（端裏）「二宮饗宴」（住吉本臨時客の段の部分に当る）
- 二 朝餞行幸上
- 三 〃 〃 下
- 四 臣家饗宴船衆（住吉本大饗始）
- 五 大臣家大饗（別本大饗鷹飼渡 住吉本大饗終）
- 六 叙位
- 七 御齋会
- 八 真言院御修法
- 九 踏歌
- 一〇 射礼（住吉本の射遣の段）
- 一一 賭弓（住吉本の射遣の段の部分）
- 一二 仁王会（住吉本にはない段である）
- 一三 外記政始（別本外記序 宮内省園韓神祭 除目御前儀 建春門外記政始）

二四 内宴 (住吉本御燈 内宴)

二五 蹴鞠

二六 稻荷祭 (端裏)「獅子舞祭」 (住吉本稻荷社御旅所、城南宮祭、馬

長の行列の段に、住吉本には存在しない場面を含む)

二七 競馬 (住吉本梅宮祭の段)

二八 子日 (住吉本関白賀茂詣社頭の部分)

二九 加茂祭 稻荷祭

三〇 六府献菖蒲 宮内省鎮魂祭

三一 左右近騎射

三二 印地打 (住吉本五月印地の段と祇園御霊会の段)

三三 祭図名未詳 着鉢政

三四 六月祓

三五 弓場始

朝観行幸が上下二巻に分かれていることや、住吉本梅宮祭の段を競馬、関白賀茂詣の舞人の走馬の一部分を子日と称しているなどが特徴である。住吉本に比べ、関白賀茂詣の行列、闘鶏、賭射、中宮饗、今宮祭、正月印地などの巻を欠くが、仁王会の巻と稻荷祭の中のいくつかの場面は、住吉本にはないものである。仁王会の図については、問題があるので、後で扱うことにする。稻荷祭の巻は、京都大学蔵山田以文旧蔵本(十三巻)の、第七巻中の同名の段と同じで、住吉本に見られる場面と住吉本には存在しない場面が入り混って、一巻を構成している。住吉

本の稻荷社御旅所の段の⁽⁴⁾前に、町中を行く行列や川や橋、御旅所の対岸が画かれており、御旅所の後段には城南宮祭や馬長の行列の段をおき、この馬長の行列の末にも、住吉本にはない人物等を画いている。この巻に関しては、福山敏男博士の論文「年中行事絵巻京大本について」⁽⁵⁾で、詳しく紹介され、考証されている。

3の水野忠央旧蔵本は、『日本絵巻物全集』にはとりあげられていないが、江戸末期の写とみられ、やや淡彩で省略も所々にあるが、一応住吉本で彩色されている巻には、彩色が施されている。射遣、賭射の巻と御斎会のうち右近衛陣饗、内論議の二段を欠く以外は、内容は住吉本と同じである。各巻、黒地の紙に金銀で蝶鳥文様を描いた表紙に、金小箔散らしの小短冊の題簽が付けられ、「年中行事」とあり、下に行事名が小書で書かれている。各巻縦約四七糎。各巻の構成は、現在の住吉本とは大分違っているが、福山博士が『日本絵巻物全集』で紹介された芸大蔵一本とは、欠巻、欠脱部分を除けば、ほとんど同じで、住吉本の古い形をもつものとみられる。『日本絵巻物全集』の解説の中で、福山博士は、如慶時代の住吉本、十五巻本の状態を想定し、復原の操作を試みていられるが、水野本は、大体この復原本に近い。水野本の巻の名称のうち、関白賀茂詣行列を斎院御禊、同じ関白賀茂詣の社頭の巻を庭乗としており、江戸時代の呼称を窺わせる。水野本が、同類であると思われる芸大一本をはじめ、諸本と全く違っているのは、内宴の巻の各段の順序である。これは五つの場面から成っており、現在の住吉本は錯乱して

いるものとみられている。これらを表にすると左記のようになる。(内宴冒頭と名付られた大垣の図については省略し、行事のみを記す)

現在の住吉本画面の順		行事順	芸大 I	松岡本	水野本
(1)	公卿天皇を拝する	1	1	1	1
(2)	献詩披露	4	3	3	5
(3)	公卿昇殿供御	2	2	2	4
(4)	御遊	5	4	4	2
(5)	妓女の舞	3	5	5	3

ほとんどの本が妓女の舞を巻末へ持ってきて来ており、画面の効果を狙って、原本が既に実際の行事の順と変えたものかとも考えられているが、水野本のこの順序は、模写した当時の祖本によるものか、考証の結果入れ替えたものか、あるいは単に継ぎ違えたものかは解らないが、一応一つの特徴である。

水野本は、松岡本と同様に、ほとんど住吉本の系統であるが、細かい点を比較すると、いくつかの差違に気付く。例えば内宴の巻の公卿昇殿供御の場面で、水野本は「公卿ノ袍ニチャト記シタルハ始メニ山鳩色トシルセシニ同シ」という貼札を写しており、これは松岡本にもあるが、住吉本にはない。しかし献詩披露の場にある「御袍始メニ同シカルベシ」、御遊の場の「着御ヲハジメ公卿ノ装束前ニ同シカルヘシ書カヘタルハ誤ナリ」の貼札は、水野本、松岡本に写されている通り、住吉本にも残っているから、住吉本の公卿昇殿の場面の貼紙ははがれてしまったのであろう。同じ内宴の巻の始めの場面で、宣陽門の廊の箇所

に貼ってあるべき「内室」の貼紙が、住吉本では温明殿の方へ移って、誤った位置に貼られているが、これも水野本、松岡本では、もとの正しい位置に書きこまれている。また御燈の段の天皇の御袍に関する「此御袍黄櫨染ナリ彩色付モ文モ誤レリ」との貼札も、水野、松岡両本ともに写しているが、住吉本にはない。福山敏男博士が、前掲論文「年中行事絵巻京大本について」で、京大本の梅宮祭の段の末には、本殿の背後の築地や樹木、田など、住吉本にはない部分が画かれていることを指摘されたが、この京大本と同じ部分は、松岡本にはあって、水野本にはない。水野本は住吉本と同様、本殿まででこの場面を終っている。その上にまだ住吉本のこの梅宮祭の段は、改装する時にでも切りとられたものか、京大本や松岡本に比べると、画面の上下が切れていることが認められる。ことに上部の人物の顔などが欠けてしまっているが、水野本では画面上下の欠損はない。水野本は、京大本、松岡本よりも住吉本に近いが、住吉本の古い形を残していると考えられよう。この他、貼紙や彩色の注等、細かい異同は各巻にみられ、水野本との細かい対比も、今後住吉本を調べてゆく上には必要と思われる。

書陵部現蔵の年中行事絵巻は、以上三部の他に、前記のように抜書類がある。このうち4の『年中行事抜書』、5の『年中行事朝覲行幸図』は、建築物等の全くの部分抜書であるので省略し、その他を略述しておく。

6の『年中行事絵抄出賭』は、内題に「年中行事絵第十五巻抜画」として、住吉本の射遺、賭射の巻の一部分を抜写、部分彩色したもの。『年中行事絵巻物十六巻有之、内十六ノ巻一卷闕本也（下略）』という、安永九年伊勢貞丈の奥書がある。7の『年中行事絵川渡図』は、住吉本の関白賀茂詣社頭の場合より、人物を抜書、部分彩色したもので、伊勢貞丈の考証注記が加えられている。8の『年中行事除目竝中宮大饗抜写』も、住吉別本の除目御前儀の段と住吉本中宮饗の部分抜写。9の『年中行事絵巻抜写』は、二巻のうち、題簽に「除目弓場始」と内容注記した一巻が、表に「除目の事」と題して、住吉本の叙位の段―すなわち鷹司本の除目御前儀の段―を描き、裏面に弓場始の段を描いている。もう一巻は「除目御前儀外二図」と題簽に注記があり、鷹司本の除目の巻の、除目竟夜、同清書、外記庁儀の各段を写している。前述したように、この後半の部分は鷹司本にしかみられない部分であるから、鷹司本系の写しであることが考えられる。なお、「除目御前儀」という名称のある題簽は、当部での整理の際に後補されたもので、原題簽ではない。

10の『年中行事画巻略』は、部分抜書の集成とでもいえるべきもので、現存の「年中行事絵巻」のうち、鷹司本の一部を除けば、ほとんどの巻からの抜写が収集されている。序に「年中行事画考」と題する長文の考証が附けられている。筆者は国学者長沢伴雄で、⁽⁶⁾「天保十四年正月稿」とある。この考証で、長沢伴雄は、『年中行事絵巻』の成立につき、『源氏物語』絵合の巻に見える、延喜の帝が詞書を書かれた年中行事絵巻を

実在のものとしており、これに後白河院が書き継がせ、さらに順徳天皇が、飛鳥井雅経と光長にこれらを写させたのであらうとの意見を述べている。これは伊勢貞丈の『舳舻訓』巻三で、住吉広当の言に拠って述べられている説（『考古画譜』所引）と似たようなもので、当時行われた説かと思われる。伴雄は、「さて今そこゝに散はひたるを、京に江戸にあまねくあさり出て模しとりて」収集したと述べ、通計五十巻の現在本目録を掲げている。巻名が直ちに現存本と一致しないものもあるが、大略現存本と大差はないようで、巻数が多いのは、各行事ごとに一巻と数えているためとみられる。伴雄も、この五十巻の内『年中行事絵巻』以外の絵巻の混入や、行事名の誤りを指摘した上、さまざまな種類の行事があるのは、延喜御本、法皇御本、光長本の三種が混在していることによると述べ、さらにこの三種は識別出来るとして、「これ等の事は、⁽⁷⁾本篇古画通考の画やうの条々に弁へおけるを見てしるべき物ぞ」と結んでいる。現在では光長が後白河院時代の原本筆者であらうと考証されており、延喜本など三種の混在という考え方は認め難いが、どのような点によってこれらの行事絵を識別したものであろうか。現在『古画通考』という書の内容は知られず、⁽⁸⁾伴雄の考証は知ることは出来ない。この『年中行事画巻略』収載の部分抜書には、ほとんど考証は添えられておらず、序文と直接対応はしていないようである。

11の『賀茂臨時祭絵巻』は、住吉別本の賀茂臨時祭の巻の写し。

12の『賀茂詣図』は、巻初に「書賀茂詣図」と題して、貞享五年四月梨

木枯之による長い序がつけられている。この文は狩野親信が書写した関白賀茂詣図に添えられたもので、本書はこれの転写本。安永三年四月狩野正栄の書写奥書がある。内容は、前半は住吉本関白賀茂詣行列の巻の写しで、後半は、鷹司本賀茂詣の巻と関連しているとみられる。本巻については後に述べたい。

以上が、書陵部蔵の諸本の概略である。

二

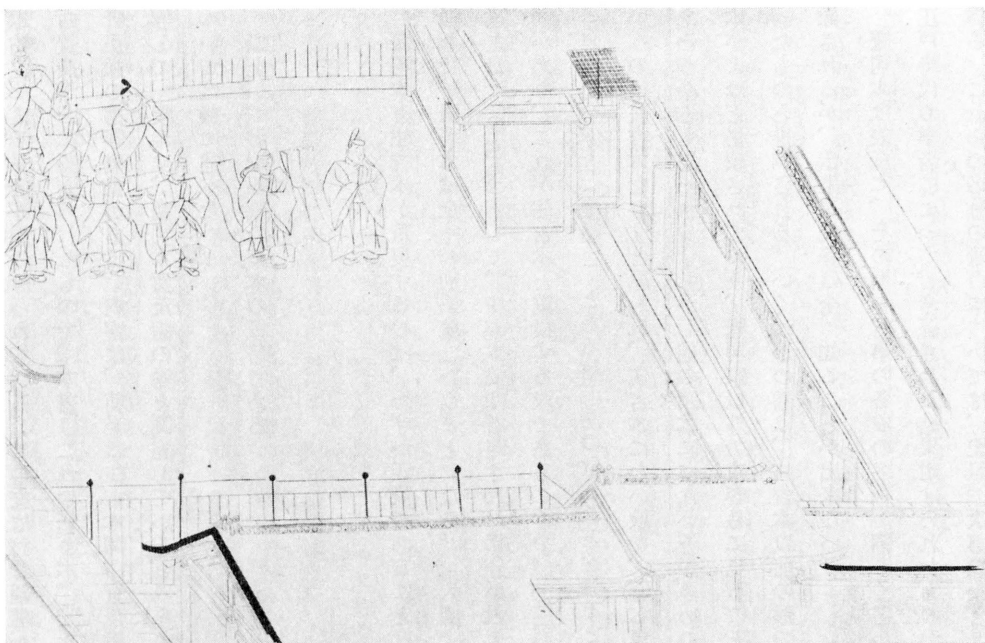
鷹司本と住吉本が重複するのは、わずかに四段であることは既に述べた通りで、鷹司本は全くの別系統ということになる。「大饗十五卷之内相違之處」(第四卷)として、住吉本では省略された部分が書きこまれた画面があり、これが住吉本と重複する段であることや、「行列の末十五卷ニ無之處令写之(後略)」とある第三卷の付札などを見ると、十五卷とというのは住吉本をさすと思われ、住吉本にない段を、写し集めたものであろうかとも思われる。しかし他の諸本にはない巻が多いのは、その祖本がよほど秘蔵されており、鷹司家以外では容易に見ることが出来なかったものと推測される。いくつかの巻は、住吉本以前の形であろうと想像されるが、伝来系統等は全く知ることが出来ない。

鷹司本は表紙に、その巻の行事の各段の名称が細かく書かれており、江戸時代の学者によって、考証された結果附けられたものとみられている。これらの名称の適否については、記録や次第類などと照合した上

で、確定されるべきであると思われるが、本稿では、鷹司本全巻に関しでは、到底及ぶことが出来ず、これらの名称のうち、住吉本や別本と異なるものや、疑問のあるものについて、二三をあげて問題とするにとどまった。他の巻については、今後さらに調査してゆきたいと思う。

まず鷹司本と住吉本で名称の違う段、鷹司本除目の巻と住吉本叙位の段について考えてみる。住吉本で「叙位」とされている単独の一段は、鷹司本では第五卷「除目」の巻の第一段であり、「除目御前儀」と考定されている。画面は、天皇出御のもと、清凉殿孫廂に関白、大臣、公卿らが着座している図である。叙位と除目の御前儀は、状況はほとんど同じであり、『雲図抄』除目の項にも「御装束儀一同叙位」とあって、画面からは見分け難いようである。この段は、松岡本でも単独で、「叙位」と称しているが、水野本のこの画面には、「付札叙位 付札ノ下ニ如此四字書付アリ除目職事」と注記されており、又、葉室家旧蔵本の抜写には、この場面に「除目ノ事」の注記がある。

鷹司本はこの段に続き、関白等が退出した清凉殿の図があり、「同竟夜」と称されている。これは住吉別本にあって「除目御前儀」とよばれる単独の一段と同じである。鷹司本の如く続くとすれば、天皇出御の場面の方を「御前儀」と称するのが、妥当と思われる。鷹司本は、さらにこの後に二段、左近陣座での清書、外記庁での下名の儀と続いている。この三段も、葉室家旧蔵本にあるが、この抜写では行事名が解らなかつたらしく、鷹司本のように細かい段名はない。『江家次第』巻四や『建



第1巻第1段 家拝礼儀

『武年中行事』等を参照すれば、鷹司本のこの巻は、除目の一連の行事とみて誤りはないようである。住吉本や別本の名称は、この一巻が分離して後に考定されたものかとも考えられる。

同様の例に、鷹司本第七巻外記政始の巻がある。この巻は、外記政始の行事を、外記庁における晴儀、南所儀、陽明門出立の三段に画いている。別本では二箇所に分かれて入っている、外記庁、建春門外記政始の二図は、共にこの鷹司本の第一段が分かれたものである。これも鷹司本のような一巻がもとの形で、別本はこれが剥離したものであろう。

鷹司本第六巻園韓神祭の巻も、別本の同名の段よりも詳しく、さらに左に続く画面には、陽明門あるいは郁芳門かと思われる内裏の門が画かれている。この左側の画面を、右の園韓神祭の画面の続きと考えると、宮内省内の園韓神社といわれているこの築地に囲まれた二つの小さな社は、内裏の東面の門外ということになる。福山博士は、この点を指摘されて、この行事を園韓神祭とよぶのは疑問であるとされている。図柄からいって、たしかにこの内裏の門外の光景は、次の鎮魂祭の場面に続くとするよりも、前の段に続くもののように考えられる。但し、この場合、門の光景と前段の園韓神祭、後段の鎮魂祭、ともに丁度紙の継ぎ目で画面が分けることが出来るため、あるいは錯簡かという可能性も皆無ではない。その点も含めて、この巻は見直される必要があろう。

一段だけ描かれている場合、何の行事かを定めるのは、類似の行事も多く、簡単には定めにくい場合が多い。あるいは何かの巻から分離した

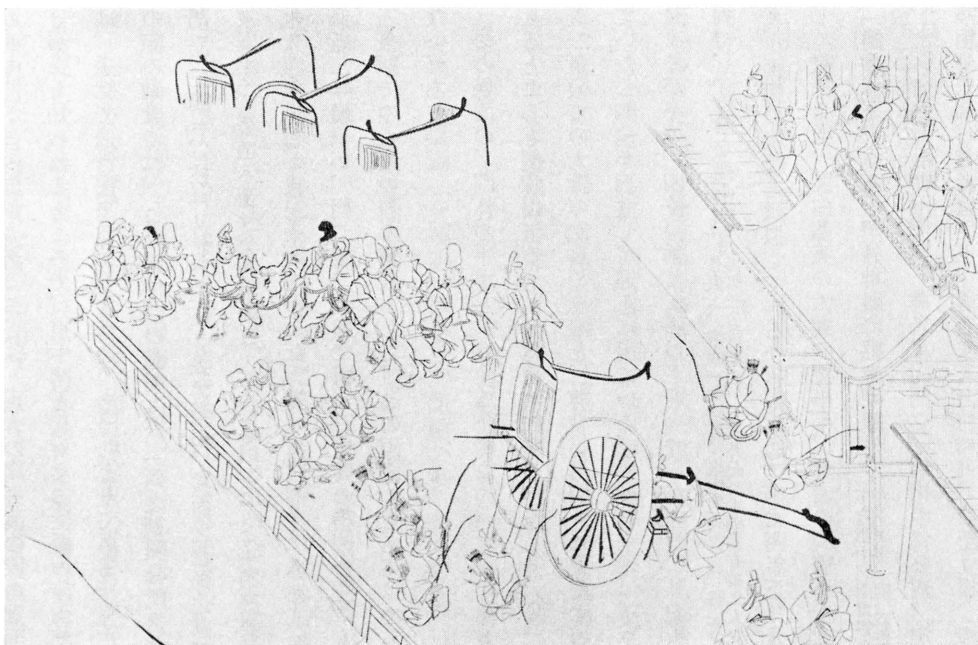


図1 鷹司本 年中行事絵巻

ものではないかと考える必要があろう。その一つとして、鷹司本第一巻第一段家拝礼儀を考えてみたい。この画面(図1参照)は、高位の人の邸と見られる門内に公卿らが三列に列立しており、門外には牛車が到着している図で、正月一日摂関家の拝礼に人々が参集したところと考えられて、この名称がつけられたものであろう。「家拝礼」とすれば、これは一段のみのものであろう。しかし画面右の手前に見える中門から門までの間と、人々が列立している後に、幔がはりめぐらされている点から、別の行事ではないかという疑問がおこる。例えば、この邸門の舗設からは、大臣家大饗などが想定されるのである。

大臣家大饗の巻は、住吉本に、鷹飼等帰参、大饗終、大饗始の三段があるが、鷹飼帰参と大饗終の間には、踏歌の画面が入りこんでおり、大饗の始と終も順序が逆に継がれていて、もとの巻からは分離していることが考えられる。さらに別本により、この大饗の始と終の場面の間に、南庭を鷹飼が渡る一段を補うことが出来る。この大饗の各段を通して、大饗の際の大臣第のあちこちに幄がたてられ、幔がめぐらされているのが見られ、ここで問題とする例の「家拝礼」の一段も、これらの続きではないかと考えられるのである。住吉本、別本の大饗は、場所が東三条殿と考証されている。この一段も東三条殿として考えると、画面の中央にある四足門は、東三条殿西門と考えられる。画面の右手前に、西門に連なる築垣に対して直角の位置に、建物の屋根と、その右に門の屋根が並ぶのも、東三条殿の西隨身所と西中門とみることが出来る。東三条殿

の西中門がこの位置にあることは、別本の鷹飼渡の段の画面の左端の部分からも知られるところで、東中門と相対する位置の西中門廊の箇所は、透廊で通行出来るような構造であったようである。ところで、大饗の際の鋪設では、この西中門の箇所は、「西之御隨身所之北面、自_二中門_一西三間ニ、柱ヨリ北ハ三尺ヲ去テ幔引、其向之北廊之南面ニハ、自_二東屏_一西ノ築垣ニ至マデ乃木内ニ入テ、幔引之」と『類聚雜要抄』巻一、永久四年忠通が東三条殿で行った大饗の指図の注にみえている。これは保延二年頼長が、同じ東三条殿で行った大饗の指図の注にもみられ、東三条殿での大饗の際の鋪設として、この画面にもあてはめられるのではないだろうか。

この場面の、門外の牛車と列立する公卿については、尊者の到着を迎えるところと解釈出来る。『兵範記』仁平二年正月廿六日、左大臣頼長東三条殿での大饗の記事でみると、尊者が西門外に到着すると、先着していた公卿達が列立して迎えに出ている。大納言宗輔以下左宰相中将師長までが一行、四位少納言成隆以下右少弁らが一行、外記大夫史等が一行で、「各降立西中門外^{各東上南面一大納言、当中門列立之、四位少納言、}」とみえ、画面の状況と類似している。『山槐記』保元四年正月廿二日条、同じく東三条殿、関白基実の大饗の記事も、尊者の到着が告げられると、「諸卿以下列立西中門外神殿軒廊南砌幔外、^{下自西中門南車寄戸、公卿一列、弁少納言一列、五位弁列少納言下、}外記大夫史等東上南面（中略）尊者車向門立、宰相中将公親、実長卿、侍従宰相公光卿、尊者扈從也、尊者来入之前加列、前駈立榻、権中将実国朝

臣取沓置榻」とあって、この画面の門外の様子とも合致するようにみえる。以上の点により、この「家拝礼儀」の段は、大饗の尊者到着の段とする方が適当ではないかと考えられるが、如何であろうか。

なお、この他に、鷹司本には、大饗蘇甘栗使、尊者牛飼饗と名付けられた二段がある。大饗の始まる前、内裏から遣された蘇甘栗使が東三条殿に参入しているところと、尊者の牛飼らが饗応にあずかっている図で、前者は、『兵範記』仁平二年正月二十六日条に「勅使入自中門、昇西向妻戸、經上官座前、参進西弘庇簀子」とある蘇甘栗使参入の図とみられる。後者の記事は見出せないが、その鋪設に関しては、同記の前日正月二十五日条に「（尊者の）車副牛飼儲東車宿」とあり、『類聚雜要抄』の永久四年、保延二年の大饗の指図の注に「東之御車宿并御隨身所前、自_二東築垣_一至_二西廊_一幔引切」などとみえている。画面では幔のめぐらされた内で、牛飼らが饗の座につき、画面左に築垣とそれに連なる門が画かれている。東車宿に設けられた座とすれば、画面左端の築垣と門は、東三条殿の東面の塀と東門であり、この段のみは、北から眺めて画いている図となる。現在鷹司本では、蘇甘栗使、鷹飼帛参、尊者牛飼饗の順に続いているが、この三段も、もともとの巻の順を残しているとは認め難い。大臣家大饗の巻は、住吉本、鷹司本どちらも錯乱して後の形ではないだろうか。仮にこれら諸段を集めて、この巻を再編成してみると、

①鷹飼等帛参

②蘇甘栗使到着

③尊者門外に到着

④大饗始 南庭で主客再拝

⑤鷹飼渡

⑥尊者牛飼饗

⑦大饗終

の七段となり、行事の順を非常に丁寧に追った長い巻であったことになる。このうちの①②の順、⑥の画面の位置については、全くの仮定であり、③の画面についてもまた確定は出来ない。推測を重ねた結果ではあるが、現在一段だけで解釈されている画面も、あるいはある行事の一部分ではないかという見直しも、また必要と思われるのである。

鷹司本第三巻「賀茂詣」の巻は、問題がある巻なので、少し細かくふりたい。この賀茂詣の巻は、第一段に、右から左へと、走る牛車三輛を中心に、騎馬や徒歩で急ぐ人々を画いている(図2参照)。次に霞のような横線を描いた短かい一紙をおき、第二段(図6)は寝殿の南階の前で馬に乗っている舞人三人を描き、その左は、中門廊の外で馬に乗りとうとしている舞人達の一団があり、さらに左は立木のある小山の上に立つ人々が右方を眺めているという構成である。この中門廊の外から左に続く画面を、『日本絵巻物全集』では、この巻の第三段と見做し、「某社祭」と仮称し、その前段の第二段は、他巻からの混入として扱っている。というのは、この第二段は、鈴鹿本(鈴鹿三七氏所蔵)の『年中行事絵巻

春日祭使出立図』の一部に当たっているからである。この鈴鹿本「春日祭使出立図」に関しては、福山敏男博士の論考「年中行事絵巻の春日祭使出立図―東三条殿の場面―」⁽⁹⁾があり、春日祭の祭使が撰関第で行う出立儀であろうと考証されている。鈴鹿本は、江戸末期の国学者山田以文旧蔵本で、以文の筆で「春日祭使出立所画」と題があり、内容は三段から成り、第一段は東三条殿とみられる邸第の東中門外に人々が集まり、門内中門廊の西縁では舞人が禄を受けているところ、第二段は舞人が庭上で東遊の求子を舞っているところ、第三段は舞人達が南庭を渡るところと舞人が騎馬で南庭をめぐり西門から出ようとするところであるとされている。従って、鷹司本第三巻では、騎馬の舞人三人のみが、この鈴鹿本と共通であるから、錯簡混入であると解釈されるわけである。

ところで、先に挙げた書陵部蔵年中行事絵巻の中にある『賀茂詣図』後半は、この鷹司本賀茂詣の巻と、鈴鹿本春日祭使出立図の両者を合わせたものである。

『賀茂詣図』は、縦三〇・七厘の卷子本で彩色がある。巻頭に「書賀茂詣図」と題して、梨木祐之が長文の識語を付している。これは、往昔撰関が賀茂へ詣でるのを恒例としたこと、天禄二年撰政伊尹以下のその事例の年次と人名を列挙し、後世これが行われなくなったことを述べた後、「蓋聞此画図禁闕御屏之象也、惜哉、未識何時之詣儀也、然其丹青之郁々乎、可謂稽古之壯觀也、便俾狩野親信模写之、併録其譜、以供告朔之羊云爾 貞享戊辰四月庚申日、従四位下鴨祐之謹識」と記している。画の前

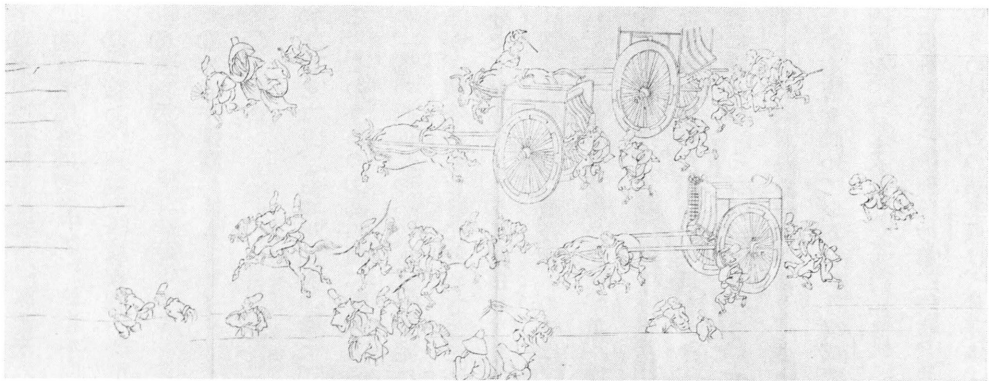


図 2 鷹司本 年中行事絵巻 第20巻 賀茂詣 前半部

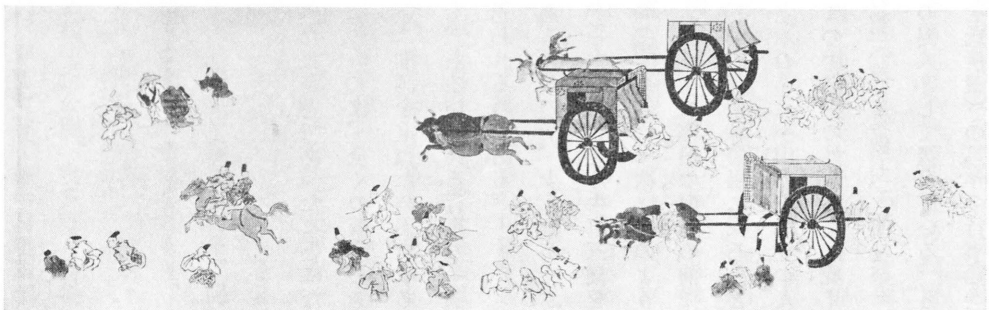


図 3 賀茂詣図 後半部その 1

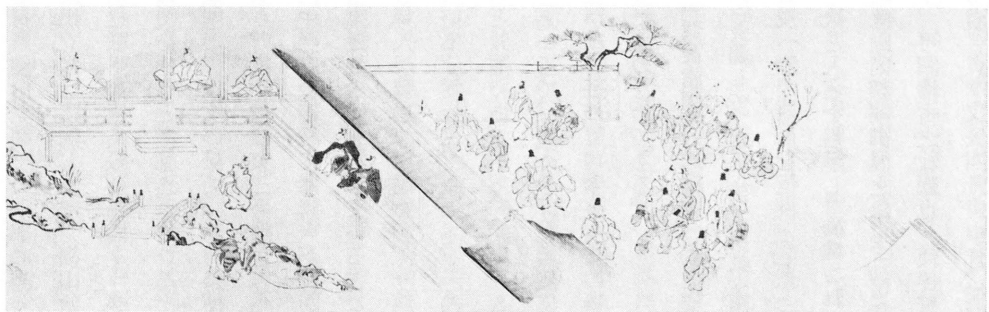


図 4 賀茂詣図 後半部その 2

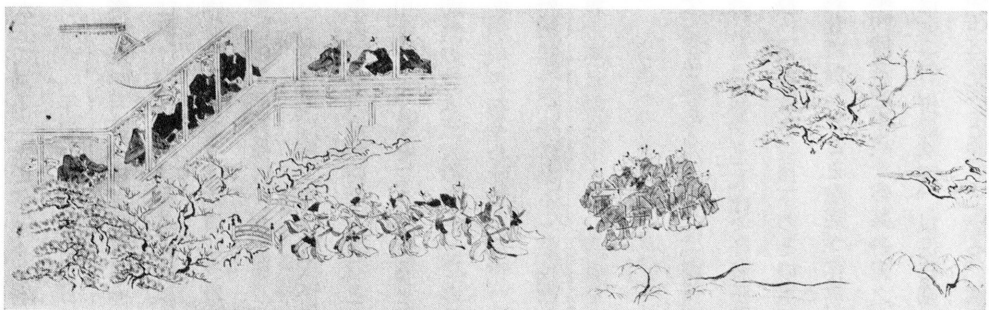


図 5 賀茂詣図 後半部その 3

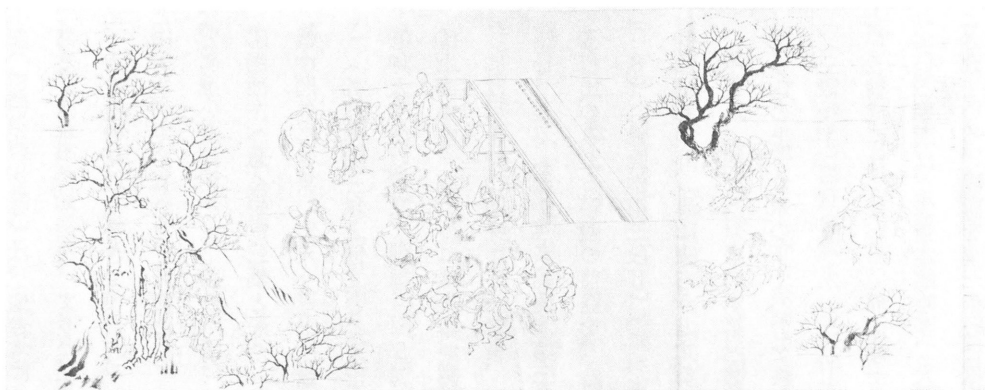


図6 鷹司本 年中行事絵巻 第20巻 後半部(図2に続く)

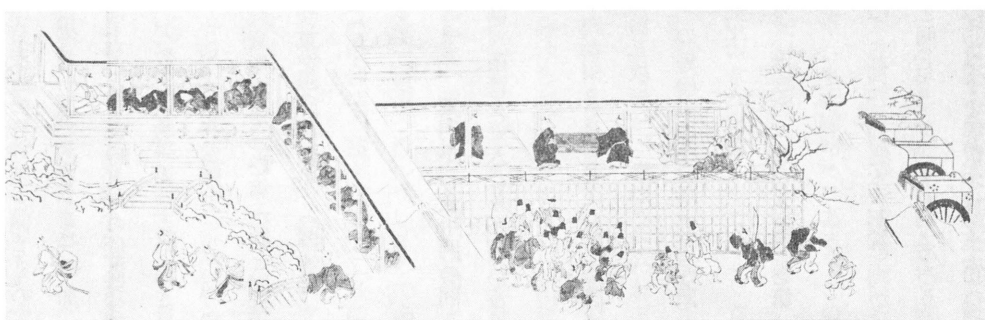


図 7 賀茂詣図 後半部その 4

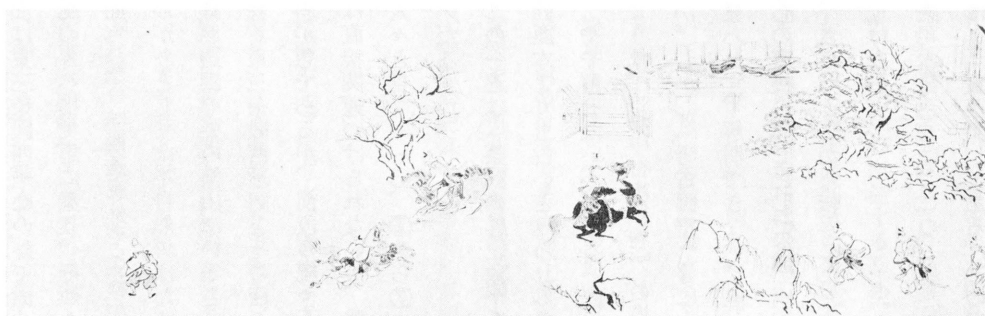


図 8 賀茂詣図 後半部その 5



図 9 賀茂詣図 後半部その 6

半部(一巻の約 $\frac{2}{3}$)は、住吉本にある関白賀茂詣の行列図と同じものである。『年中行事絵巻』よりはやや卷子自体が小型であることに加え、大よその見取り書きでもあるか、画面上部と下部の人々の位置などにズレが生じ服装なども変化しているが、人数と人物一人一人の向きなどに違いはない。後半部の画面は(図3)5・7・9参照、

①画面左へ急ぐ牛車三輛と人々(図3)。(鷹司本第三巻第一段と同)

②中門外に参集した人々、中門廊西縁で装束を受ける舞人(図4)。

(鈴鹿本第一段と同)

③舞人陪従の奏楽、列舞(図5)。(鈴鹿本第二段)

④画面の右、東門外には牛車が四輛ほどとまり、東門から東中門の間には弓を持つ隨身などが参集、画面左は、南庭を舞人たちが西へ歩いて渡る(図7)。(鈴鹿本第三段I)

⑤打出の見える寢殿の前庭を、騎馬の舞人が乗りまわしている(図8)。(鈴鹿本第三段II)(鷹司本第二巻第二段)

⑥西透廊の外、馬に乗りうとする舞人とその馬の口取など。馬が四頭みえる(図9)。(鷹司本第三巻第三段前半)

⑦小山の上、立木の下で右方を眺める人々(図9)。(鷹司本第三巻第三段後半)

という構成になっている。福山博士の考証によれば、鈴鹿本三段に画かれている場所は、住吉本臨時客、大饗などと同じで、東三条殿であらうとされている。場所を東三条殿とみて、この⑥以下を解釈すれば、⑥の

場面は東三条殿西透廊の外であり、④で南庭を徒歩で渡った舞人が、西透廊の外へ出て馬に乗り、そのうちの先頭は既に南庭へ乗り入れ(⑤の場面)、残りは西透廊外でこれから乗るところ(⑥)であると考えても、つながりとしては不自然ではない。さらに⑦の小山の上の人々も、東三条殿西透廊の外に築山にいと考えられる。別本大饗の鷹飼渡の段にみられる東三条殿西透廊とその西の築山に比べると、この⑦の築山はやや傾斜が急であるが、前段の続きからみて、考えられないことではない。①は直接関連づけられないが、②の東三条殿中門外へ参集するために急ぐ人々を見て、一応、①から⑦まで、一つの行事を描くといえるのではないだろうか。

この一巻は「禁闕御屏之象」を狩野親信が模写したもので、その年次は鈴鹿本よりも古いとみられる貞享五年である。「禁闕御屏」とあるのが、やや解せないが、あるいは『承安五節絵巻』が屏風絵に写されていたように、『年中行事絵巻』の模写が、禁裏屏風絵に使われたのであろうか。しかし『考古画譜』等にも、賀茂詣絵の屏風があったという記事は見られず、説明できない。但し、この『賀茂詣図』が、年中行事絵巻からの直接の写しとしては、画面にズレが多い点、一旦屏風の絵に写され、さらにそこから転写したとすると頷けるが、この点に関しては推測の他はない。

鷹司本第三巻は、この一巻から中心の二段が脱落した形で、巻の名はやはり「賀茂詣」である。この行事名が、賀茂詣であるか、春日祭使出

立図であるかが問題となる。福山博士の論考の注によれば、鈴鹿本と同じ三段は陽明文庫蔵本等にもみられるとのことであるが、鈴鹿本より書写が新しいというこれらは、おそらく鈴鹿本と同じ名称でよばれているのであろう。書陵部蔵本、長沢伴雄の『年中行事画巻略』にある、この段からの抜書にも「春日祭使出立図」と注記がある。

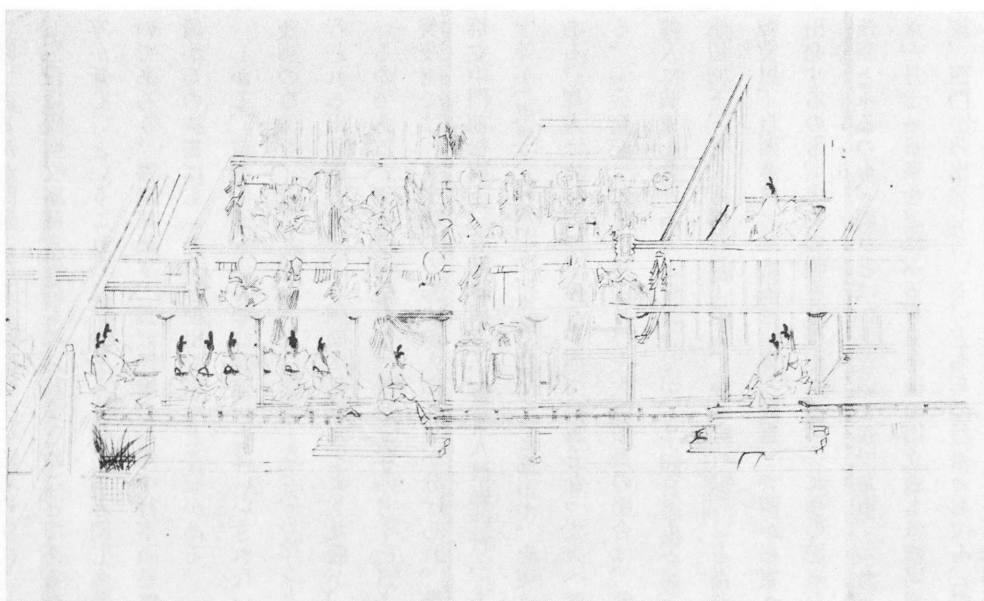
しかし、賀茂詣図とみるのは間違いとはいえないようである。賀茂詣の事例を、『中右記』や『兵範記』などから拾うと、東三条殿等で行われる出立儀では、この画面に見られるような儀が、やはり行われているのである。例えば『中右記』長治元年四月十七日条の右大臣忠実の賀茂詣では、まず朝のうちに舞人に装束が分けられ、饗饌の後に「陪從群立中門前松樹下、有歌舞興求子、次舞人渡庭西行」、その後、御幣や神宝等が「東渡」、舞人が「一々騎馬渡之」とあって、忠実は「從東門出給」とある。舞人は徒歩で西へ渡り、西で騎馬となって東へ渡っているのである。『兵範記』仁平四年四月の左大臣頼長の場合は、前々日の十二日に舞人に装束を分けるを行ったが、十四日の出立儀では、「陪從列立池辺柳下、舞人袒褐行舞了退入、渡南庭自東中門渡西也」とあり、その後「御幣神宝以下自西渡東」がある。「舞人騎馬」で西から東へ渡り、東門から出発するのも、忠実の時と同様である。これらの記事を参看すると、賀茂詣とみるのも、誤りとはいえないようである。『台記別記』仁平元年十一月十一日条などにみる春日祭使出立儀もほぼ同様の行事があった後、西門から出発している。どちらの行事としても、舞人の動きのみを

とり出して描いていることになる。「賀茂詣」とした場合、『賀茂詣図』④（鈴鹿本第三段Ⅰ）の場面で、東門外に牛車が止っているのも、この行列が東門から出発するため、随從する公卿達のものとも考えられる。またこの『賀茂詣図』の名は、貞享五年以前からの伝承であるように、梨木祐之の識語からは受取ることが出来、古くは賀茂詣図とよばれたものが、分離した後、別名でよばれたかと思われるが、この巻の行事名については、東三条殿における多くの実例と細かく照合して、確定されなければならないであろう。

鷹司本では、まだこの他、第九巻左右馬寮図の巻や、第六巻法会画の巻が、何の行事であるか、確定されていない。又、第一巻第二段式部省省試図や、第八巻春日詣の図も、他に類似の行事もあることであり、一応、実際の記録の記事等に参照して確める必要があると思われる。

三

松岡本は、住吉本、別本と大体同じ巻が多く、住吉本と異なるのは、稻荷祭と仁王会の二巻である。稻荷祭の方は京大本と同じで、住吉本よりも古い形を残しているかとされていることは既に述べた。仁王会の巻についても考えてみたい。この巻は、『日本絵巻物全集』の諸本対照表によれば、松岡本の他、東京国立博物館蔵乙本にしかなく、抜書が『年中行事画巻略』にあるのみである。画面は清涼殿で、高座や礼盤を設け、多くの僧が参入し、公卿も列座している法会の場面(図10)である。



第12巻 仁王会

画面はやや東西につまった感があるが、住吉別本にある「忌火御飯」の段と同じように、清涼殿の身舎、東廂、孫廂を画いている。この画面を、『雲図抄』に載る仁王会の指図と比較すると小異がある。まず指図では、仁王会の鋪設は、この画面よりも一体に南に寄っており、孫廂、東廂の南三間にそれぞれ散花机、礼盤等が置かれている。この画面では、清涼殿の身舎の御帳台に、本尊らしい仏像が飾られ、この前面、すなわち東廂、孫廂の南四間に礼盤や行香机があり、礼盤の右には高座が設けられ、その昇橋も見える。画面右奥は吹抜に画かれているが、御帳台の北一間隔てた室内、つまり夜の御殿とおもわれる位置に、脇息を前に置いた直衣姿の人物が一人画かれている。夜御殿という位置からして、おそらく天皇の御座であろう。礼盤等の位置の違いに加え、御帳台や夜御殿の天皇の御座などは、仁王会の指図には異なるものである。そこで、これを清涼殿で行われる他の仏事の指図と比べると、五月中の吉日を扱ひ、五日間にわたって行われるという講会、最勝講の指図とはよく合致する。最勝講の鋪設は、『蓬萊抄』にも、「御装束儀、撤清涼殿御物等、母屋廂懸、幡花幔代、如恒、御帳内安、御仏、供、香花燈明、御帳四角立、四天座、御帳北頭立、聖供机、庇第四間立、礼盤高座等、孫廂第四間立、御経管机並散花行香机」（中略）夜御殿内儲、主上御座」とみえており、僧綱等の座についても、『雲図抄』の指図、『蓬萊抄』ともに、この画面とよく合致する。『建武年中行事』にも、「この月に最勝講おこなはる、かねて日次をさだむ、もやの御れんたくくあげて、御帳のかた



図 10 松岡本 年中行事絵巻物

びらまきて、御ざをとりかけて、本尊をかけたなり（中略）御ちやうもん所は夜のおとど也」とある。これらを参照すれば、この画面は、仁王会でなく、最勝講を画いたものと推定される。従って二月の行事ではなく、五月の行事となる。

現在、『日本絵巻物全集 年中行事絵巻』などでは、住吉本を中心とするため、鷹司本、松岡本の行事名称などは、ほとんどそのままに用いられている。しかし実際には、以上の二、三の例で見てきたように、現在の『年中行事絵巻』諸本に附されている行事名称は、古くからの伝承と、後世の考証によるものなどが混在し、これらの適否については、まだまだ考証の余地が残されているようである。本稿では、たまたま見直した際に気付いた点のみにふれたに過ぎず、ことに鷹司本などは、もっと全体にわたっての調査、検討が必要であろう。

なお、まだこの他に書陵部には、『考古画譜』に、あるいは『年中行事絵巻』のうちかとされている『野行幸図』の模本や、今迄全くとりあげられていないが、あるいは『年中行事絵巻』と関係あるかと思われる『山寺参詣図』などの諸本もある。これらについても、いずれは関連して調査してゆく必要があると思われる。

註(1) 現在書陵部では『摹古絵巻』の書名で、古い絵巻の模写本八九巻が一括されている。いずれも水野忠央旧蔵本であるとみられているが、『摹古絵巻』の名称は水野家旧蔵当時のものではない。

(2) 二巻とも題簽には「四方拝以下年中行事共二」とあり、一卷に「四方

拝 小朝拝 元日節会 木造始 千秋万才 猿ノ舞 白馬節会 御吉書揚、もう一卷に「八朔献馬 例幣発遣 新嘗祭 豊明節会 賀茂臨時祭 御神楽」を描いている。詞書あり。大体彩色が施されている。原在泉写。『増補考古画譜』に言う『近代年中行事絵 五巻』の約半分に当るものではないかと思われる。

- (3) 『日本絵巻物全集 第二四巻』解説によれば、描かれた行事の月日の早いものから順に仮の番号を附けるとあり、行事が二つ以上の場合、巻初の行事の月日に依るとのことである。

- (4) 古典芸術刊行会発行の複製本『田中家所蔵 年中行事絵巻』解説（鈴木敬三博士）では、祇園御霊会御旅所とする。

- (5) 『仏教芸術』六九号（昭和四三・一二）

- (6) 紀州藩士、国学者。本居大平門下。文化五年生、安政六年歿（『国学者伝記集成』）。

- (7) 伝記によれば、長沢伴雄は晩年罪を得、嘉永六年押込、安政二年には揚屋敷入りとなり、その夥しい蔵書は官に没収されたという。あるいは、この序が添えられる筈の『古画通考』はまともられずに終わったのではないかと思われる。なお、この『年中行事画巻略』二冊にも、「紀伊国学所」の蔵書印が捺されている。

- (8) 「年中行事絵巻 京大本について」（『仏教芸術』六九号）

- (9) 『美術研究』一九七号（昭和三三・三）。『日本建築史研究 続編』（昭和四六）に補訂が加えられて収載されている。